

# 老人とペットの関わりについて

佐久川肇<sup>\*1</sup> 保住芳美<sup>\*2</sup>

## 要 約

近年、ペットに死なれた飼い主が、身近なものを失った場合と変わらない精神的打撃を受けることが知られ、“ペットロス”として注目されている。

ペットロスは特に孤独な老人の場合に、より深刻な様相を呈するといわれている。

現代の産業社会においては、老人は生産活動から遠のき、人間関係が希薄になって、いわゆる脱社会化現象が起こりやすく孤独に陥りやすい。ペットとの関わりはこのような老人の孤独に対して大きな支援をもたらす。ペットとしての犬の場合にはその特性から飼い主と関わることを心から喜んで飼い主に従う。それは対等な人間関係とは本質的に異なるが、関係の真実さと、老人のペースに見合った関係が得られることから、生命エネルギーが乏しくなった老人にとっては、人間関係に代わるものを与える援助の手段として積極的な評価が必要である。

## はじめに

動物は昔から人間に飼われ、人間の傍らにいて生活をともにしてきた。それは家畜として、生活の手段としての牛、馬、ニワトリ等であり、あるいは放し飼いにされてる犬、猫であった。しかし、社会の進化と共に人間と動物の関係は変化し、生活の手段としての意義は比率として少なくなり、ペットとしての役割が前面に出てきた。

近年、ペットは単なる愛玩動物としての受動的な存在だけでなく、生活を共にするもの、さらには家族の一員として認識されるようになった。このような考え方のもとに、近年「人と動物とのふれあい活動」が取り上げられるようになった。さらにペットを飼うことにより、人と人との関係では満たされない心の空白感を埋め、充足感を与えてくれるという考え方が行きわたってきた。そして「動物介在療法・動物活用療法」等、動物の「介在」により治療的効果を追求する文献も少なくない<sup>1)</sup>。特に社会的に孤立しやすい老人においては人生のパートナーとしてのペットの存在の比重が増している。

欧米でペットに死なれた飼い主が身近な者を失った場合と変わらない精神的打撃を受けることが少なくないことが知られ、ペットロスとして紹介されたが、この現象は日本においても少なくないことが知られ<sup>2,3)</sup>、その症状が身近な者を失った場合と変わ

らないことが驚きの目をもって見られた。

ペットロスによる症状は、特に孤独な老人の場合に、より深刻な様相を呈することが知られている。一般に老人は家族、友人、知人等とのつながり、交わり、関わりが次第に希薄になり、いわば社会から疎外された状況下に陥りやすい。人との関わりから疎遠になって孤独に陥った老人にとっては、ペットの存在は人間関係に代わる重要な意味を持つため、本稿では老人にとってのペットとの関係のあり様とその意義について意味論、関係論の視点から考察を試みた。

現在国内で飼われているペットのうち犬は約1000万匹、猫は約700万匹と推測されている。<sup>2)</sup> 本論文ではペットとして飼われることが最も多く、我々の生活と密接な関わりのある犬を主体に考察した。

## 現代社会における老人の立場

長年の労働と拘束から開放されて現役を引退する老人には、役割からの開放と余生を楽しむ自由な時間が約束されているかに見えるが、同時に孤独と生きがいの喪失という局面に立たされる場合が多いことはよく知られている。

現代社会は科学技術が目ざましく進歩し、社会の生産力も著しく増大したことによって、豊かさを手に入れた社会である。そしてそれは市場原理の導入によって生産の効率化を目指した産業社会である。

<sup>\*1</sup> 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科 <sup>\*2</sup> 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉学専攻  
(連絡先) 佐久川 肇 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

このような社会では生産力の高い者がより強い力を持つことになる。社会は生産集団と非生産集団に二分され、老人の多くは非生産集団に組み込まれ、不安定な地位に転落する。これはいわば社会の側から否応なく老人に突きつけた状況である。そして地位の喪失、役割の喪失という形をとって現れた一種の社会からの疎外である。

しかし、心身の機能低下による生のエネルギーの低下はこれに止まらず、老人自身の側からも別の疎外の状況を作り出している。即ち集団に属して役割を果たしていくことが煩わしくなる。そのうち関わりのあった者たちは離散あるいは死別し、孤独感は深まっていく。さらに身体の変調や歩行困難等の身体状況の悪化がこれに拍車をかける。これが老人の側から起こるいわゆる脱社会化（disengagement）<sup>4,5)</sup>と言われる。このような状況下にある老人が、ペットを飼う意味について考えたい。

### ペットを飼う意味、特に犬の場合

#### 1. ペットを飼う喜び

犬の祖先は群れで行動し、強い社会性を持つ狼であるといわれている<sup>6)</sup>。狼は集団で狩を成功させることが生き延びる条件であるため、群れの上下の秩序維持の感覚と、仲間に対する強い忠誠心を本能として身に付けている。犬の行動特性は基本的に狼と異ならないとされている<sup>6)</sup>。しかし、人間は長い年月をかけて狼の特性を、人間に合うように作り変えてきた。その結果、飼い主を自分のリーダーとみなし、飼い主と一緒にいることを喜び、その指示に従い、飼い主に絶対的な忠誠を尽くす現代の犬の特性に作り変えられた。彼らは飼い主から餌をもらうためにそうするのではなく、そうせずにはいられない本能からするのである。彼らが飼い主に示す喜びや忠誠心は本能に基づくため、彼らが置かれた状況の違いによって左右されることなく、飼い主の態度によって変わることがない。このような犬の特性は、孤独な老人にとっては特別な意味を持つ。

人間は誰しも本来は他人とのよい関わりよい交わりを求めている。そして他の生き物同様、人間も不快を避け「快」を求める行動原理に支配されていることが知られている。人間が社会の中で生きる目的は、ここで得られる交わりの中から、できる限り「真なる」（実存的な）交わりを樹立することによって、「快」の感覚である「生の充足感」を手に入れることである、という見方も可能である<sup>7)</sup>。

しかしそのような関係は双方が真の交わりを持ちたいという欲求を持ち、双方が交わりによる充足感を得ることによってしか得られない。このように、

ヤスパースの言う、実存がふれ合う真の交わりが成り立ったときに初めて、我々は「関係の充足感」を得ることができる。

一般に支配、服従という関係は多くの場合、支配する側に支配欲の充足による「快」をもたらし、相対的に支配される側は支配する者の都合に従わされ、いわば道具化される「不快」を味わう。そして支配が強まれば服従は苦痛となり、被支配者にとっては、支配からの脱出が課題になっている。

しかしながら、飼い主とペットとしての犬との関係は完全な支配と服従の関係でありながら、人間同志の場合とは事情が異なってくる。犬にとってはリーダーに従うことが本能に適う事であり、犬にとってのリーダーである飼い主が特に悪意ある対応をしない限り飼い主から関わられることは、たとえ支配であっても彼らにとっては喜びである。このように飼い主とペットの犬との関係は、支配と服従という関係でありながら、人間関係では得られない双方にとって望ましい条件が充たされる。

このような関係に対して犬を人間と見立てた一種の擬人化であり、完全な支配でありながら、あたかも対等に近い相互関係のように振る舞う一種の偽善であり、自己欺瞞であるという批判も聞かれる。しかし、飼い主である老人が真に求めているものは「人間との関係」そのものよりも、むしろ「関係の真実さ」ではないかと考えられる。

ペットを飼う目的は、主としてペットに対して愛情を注ぎたいためと考えられる。そして多くのペットでは注いだ愛情に対して反応が得られる。特に犬の場合には、飼い主の愛情に対して全身で喜びを表わして反応する。その反応の純粋さが飼い主の心を動かし、飼い主のはぐくむ喜びの感情を呼び起こす。愛情を注いで育てることが生きがいとなり、我が子を育てるのと類似した愛情が育つ。それによって相手に自分が必要とされているという実感が湧いてくる。そして養うことに対する自覚と責任感が生まれてくる。このようにペットは関わる喜びと、育てる自覚を飼い主に与え、特に老人の場合には、孤独と社会からの疎外から老人を救い出し、「生の充足感」を与えてくれる。

#### 2. ペットを失う悲嘆

このようにペットから生きる充足感を得た飼い主は、当然ながらその死によって深い喪失感を味わう。一般にペットの方が人間より寿命が短いため、その死に出会う機会は多くなる。関わりが深ければ深いほどそれを失ったときの悲しみは大きくなる。ペットを失った人の中には、その悲嘆の様相が子供や配

偶者などの大切な人を亡くした場合と酷似するケースがあることが、世間から驚きの目で見られた。これは深い関わりで結ばれた、いわば連帯する相手を失って全人格的な打撃を受けた状態と考えられる。ペットを失ったときの精神症状として、悲嘆、自責の念、後悔の念、虚脱感、無気力、情緒不安定などの他に、睡眠障害、頭痛、目まいなどの身体症状すらしばしば見られることが知られている。この精神症状は喪失体験による抑うつ状態と考えられ、身体症状はこのような精神的原因が引き起こした自律神経の変調と考えられる。この現象はペットロス症候群と呼ばれ、まれなケースではないことが知られているが<sup>3)</sup>、厳密な意味での医学的診断名ではなく、このような抑うつ症状に対する俗称と考えるべきであろう。

### 老人とペットとしての犬との関係性を考える

老人が役割を失って人間関係から疎外される現象は、いわゆる否応なく社会から老人に押し付けられ

たものである。また、体力や気力が衰えた老人が、社会との接触をいともようになるのも人間関係の煩わしさを避けたいためであって、そのような老人も、自分のペースで関わるができるならば、関わりそのものは持ちつづけたいのではないだろうか。

ペットは老人が自分のペースに合わせて付き合うことができる得がたい伴侶である。彼らは本能によって飼い主と一緒にいることを心から喜び、飼い主の感情に反応する。彼らの特性と孤独な老人の状況は双方にとって快適な関係を生み出す。老人に必要なものは必ずしも精神的労力を必要とする「人間との関係」そのものではなく、むしろ「関係の真実さ」と、「老人のペースに見合った関係」ではないだろうか。意味ある生活とは豊かな関係性の中に生きることだとすれば、ここから閉ざされている老人に対する最も必要な援助とは、これを与えることではないだろうか。孤独な老人にとってペットとの関わりはこれができる貴重な療法であり、援助手段として積極的な評価が必要と考えられる。

## 文 献

- 1) ハーバート・A・ニーバーグ、アーリン・フィッシャー（1998）吉田千史、竹田とし恵訳、ペットロス・ケア、読売新聞社、pp24-32.
- 2) 瀬戸 環（1999）ペットロスの真実、毎日新聞社、pp12-24.
- 3) 西宮三代（1997）ペット・ロス、誠文堂新光社、p46.
- 4) 木下康仁（1996）老人の人間学、医学書院、pp 8-13, 42-45.
- 5) 木下康仁（1993）老人の人間学、医学書院、pp146-163.
- 6) ジンフリー・M・マッソン（1999）古草秀子訳、犬の愛に嘘はない、河出書房新社、pp184-196.
- 7) カール・ヤスパース（1977）草薙正夫、信太正三訳、実存開明（哲学II）原著（1932）、創文社、pp61-136.
- 8) 山崎恵子、町沢静夫（1993）ペットが元気を連れてくる、講談社、p68.

（平成11年11月10日受理）

## The Relationship Between Elderly People and Pets

Hajime SAKUGAWA and Yoshimi HOZUMI

(Accepted Nov. 10, 1999)

Key words : LONELINESS OF ELDERLY PEOPLE, PET LOSS

### Abstract

In recent years, it has become known that some of pet owners suffer as if they had lost their close relatives when they lose their pets. The symptoms of pet loss can be serious especially in elderly people.

In the modern industrial society, the aged become removed from productive activity which results in a lower social status. Their human relationships become unsatisfactory, and so-called “disengagement” occurs. This phenomenon is an inevitable result of the industrial society and a clear cut solution is difficult. Communication with pets gives much needed support to elderly people in such situations. Dogs, for example, are very obedient and trust their owners implicitly. This is fundamentally different from actual human relationship. However, the pet owners get a true relationship that is in accord with the pace of the elderly person.

Pets make good companions that can take the place of relationships with humans.

Correspondence to : Hajime SAKUGAWA    Department of Medical Social Work, Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
(Kawasaki Journal of Medical Welfare Vol.9, No.2, 1999 145–148)